

横浜市栄区・證菩提寺阿弥陀三尊像の調査報告

—中尊阿弥陀如来像の構造技法について—

花澤 明優美
神野 祐太

證菩提寺は相模国鎌倉郡山内荘本郷（現、横浜市栄区上郷町）に所在し、鎌倉初期の開創という。現在、本堂には鎌倉時代後期の阿弥陀如来坐像が安置されるが、当初の本尊とみられる阿弥陀三尊像が本堂向かって右側に建つ収蔵庫に安置される。本稿では当初の本尊とみられる阿弥陀三尊像について述べる。阿弥陀三尊像は、開創をややさかのぼる安元元年（一一七五）頃の製作と考えられている（注1）。この頃の和様彫刻の典型的な作風がうかがえるものとして知られ、早く大正十四年（一九二五）に国指定を受け、翌年には美術院によって修理が行われた。令和五年（二〇二三）に大正期以来となる保存修理が再び公益財団法人美術院国宝修理所により行われ、修理直後の三尊を横浜市歴史博物館開催「令和五年度 横浜市指定・登録文化財展」（令和六年二月三日～三月十日）で公開した。この度の出陳に際して、熟覧調査の機会を得た。特に中尊の構造技法について新たな見解を得たため、その成果をその他の概要とあわせて報告する。

（一）像の概要

形状

中尊阿弥陀如来像は、肉髻をあらわす。螺髮粒状（切子形）。髮際線は正面中央でわずかに湾曲する。肉髻珠・白毫相をあらわす。鼻孔をわずかに穿つ。人中はあらわさない。顎の括りをあらわす。耳垂部環状。三道相をあらわす。衲衣・裙を着ける。衲衣は左肩をおおい、右肩に少し懸かって正面にまわり、上縁を折り返して、端を再び左肩に懸ける。裙は右膝から左足裏半ばを覆う。両手屈臂。腹部正面の膝上で左を後ろに両手を組み、掌を仰いで各第一・二指頭を接する。右足を外にして結跏趺坐する。

中尊台座は蓮華座。仰蓮華・敷茄子・蕊・華盤・下敷茄子・受座・反花・框三段から成る。蓮華の蓮肉は円形。蓮弁は最上段十二枚が残る。敷茄子は円形。蕊は円形。華盤は八角、周縁に花弁をあらわす。下敷茄子は八角形。各面矩形三重の飾り。受座・反花・框は各八角形。最下段上面覆輪付き。八方隅足付き。

左脇侍観音菩薩像は、垂髻を結う。上元結・下元結は紐一条。髻頂

に後方への輪三つ、側面から後方にかけて地髪に達する髪束の輪を四つ、その前方と後方の輪の間に左右それぞれ短い輪各一を頂から垂らす。天冠台は紐二条の上に向きに広がる带状部分を重ねる（带状部分は無文であるが、正面から側面にかけては上縁に列弁状の刻みがあるようにも見える）。頭髪は髻、天冠台下正面の地髪を疎ら彫り、その他を平彫りとする。鬢髪二束耳をわたる。白毫相をあらわす。鼻孔をわずかに穿つ。人中をわずかにあらわす。顎のくくりをあらわす。耳垂部環状。三道相をあらわす。条帛・天衣・裙・腰布を着ける。条帛は左肩に懸かり右脇腹を通つて再び左肩に懸かり左胸前で初層にたくし込んで裏を見せる。天衣は両肩をおおい、正面で左右上膊内側を通つて垂下する。裙は脚部正面で右前に打ち合わせ、折り返しをあらわす。裙の両端にたくれをあらわす。腰布は膝上まで覆い、正面で右前に打ち合わせる。両手屈臂。胸下方の高さで掌を仰ぎ、右をわずかに下にして各第四・五指を接して蓮華を執る。わずかに腰を屈めて両膝を前に出し、右足をやや前に出して両足先を開いて立つ。

右脇侍勢至菩薩像は、大略左脇侍に準ずる。以下相違点を挙げる。

胸前で合掌する。腰をかがめず、膝も前に出さない。左足を前に出す。

法量 (単位 cm)

阿弥陀如来 左脇侍 右脇侍

本体

像高 一一二・九 一〇五・四 一〇五・五

(三尺七寸三分) (三尺四寸八分) (三尺四寸八分)

髪際高 一〇八・五 九一・二 九一・八

(三尺五寸八分) (三尺) (三尺三分)

髻頂—顎 二三・八 二三・八

頭頂—顎 三六・〇

面長 二二・七 九・八 一〇・七

面幅 二二・四 九・六 一〇・二

耳張 二九・一 一三・二 一三・〇

面奥 二九・四 一三・四 一三・七

胸奥(左) 二九・三 一二・六 一二・八

胸奥(右) 二九・五 一三・〇 一二・八

腹奥 三三・三 一四・五 一四・三

肘張 二九・五 二七・三

膝張 八八・二

膝奥 六二・八

坐奥 六九・〇

膝高(左) 一六・三

膝高(右) 一六・二

裙裾張 二三・八 二四・二

足先開(外) 一六・一 一五・三

足先開(内) 八・一 七・七

台座 総高 一〇二・一

品質構造

三像はいずれもヒノキ材製で、表面には漆箔をほどこす。

中尊阿弥陀如来像は寄木造りで、頭体幹部は両耳後ろを通る線で前後に短く。前半材は、正中線で左右二材を短く、内削りのうえ割首する。後半材は、後頭部は正中線で左右二材を短く、肩部に横木一材を短く後頭部材を受ける。体部は左右二材を短く（後半材は襟付近に鋸を入れて頭・体部を離した可能性もあるか）。左肩以下の体側部にマチ材（幅四・二cm）を入れ、別材を短く。前半材右方にマチ材を短く、右腰脇に三角材を短く。両脚部に横木前後二材を短く、脚部左右の地付きに各一材を短く。以上の材に内削りをほどこす。肉髻に別材を短く。裳先、左袖口に別材を短く。右手は肩・肘・手首で短く。両手首先は一材製。表面は布貼り、錆漆下地の上に漆箔をほどこす。台座は木製。黒漆塗り。

左脇侍観音菩薩像は割短ぎ造りで、頭体幹部は髻を含み一材製（木芯は左前方に外す）。髻後方から左耳後縁および右耳後方を通って踵後方に至る線で前後に割短く。内削りのうえ割首する。背面腰以下に上下二材を足す（下端から地付きの高三三cm。上部材高一六・五cm、下部材高八cm）。両腕は肩・肘・手首でそれぞれ短く。天衣遊離部・裙裾左右両端、背面下端、両足先に別材を短く。足柄は素地を残す。表面は錆漆下地の上に漆箔をほどこす。

右脇侍勢至菩薩像は割短ぎ造りで、頭体幹部一材製。両耳中央を通る線で前後に割短く。内削りのうえ割首するか。髻頂に別材を短く。背面腰以下に上下二材を足す（上部材の高さが下部材より短い）。両腕は肩・肘・手首でそれぞれ短く。天衣遊離部・裙裾左右両端、背面下端、両足先には別材を短く。足柄は素地を残す。表面は錆漆下地の上に漆箔をほどこす。

保存状態

中尊阿弥陀如来像は、肉髻珠（水晶製、赤の伏せ彩色）、白毫（水晶製、白の伏せ彩色）、右腰脇の三角材、裳先、以上すべて後補。左耳垂部は大正十五年修理時の新補。

中尊台座は、蓮肉上半、反花の二辺分、框の一辺分を除く部分は後補。蓮弁を多く亡失する。

左脇侍観音菩薩像は、宝冠・宝弁・冠繪（各銅製鍍金）、白毫（水晶製、白の伏せ彩色）、胸飾り（銅製鍍金）、左手第一指半ばより先、右手第一指、右足先、以上全て後補。髻頂後端欠損。光背（柄付き頭光。高一・八cm。輪光径三五・九cm。木製、漆箔・茶漆塗り）、台座（蓮華座。高三五・二cm。木製、茶漆・黒漆塗り）、各後補。

右脇侍勢至菩薩像は、髻頂・宝冠・宝弁・冠繪（各銅製鍍金）、白毫（水晶製、白の伏せ彩色）、胸飾り（銅製鍍金）、両耳垂部、両肘先、右足先、以上全て後補。光背（柄付き頭光。高一・四・二cm。輪光径三六・二cm。木製、漆箔・茶漆塗り）、台座（蓮華座。高三五・九cm。木製、茶漆・黒漆塗り）、各後補。

(二) 中尊の構造技法

本三尊像中尊の構造技法の詳細を紹介しているものうち、早いものでは三森達夫氏が体幹部は耳の後ろを通る線で前後に二材短くしていること、頭部後半部材と体部前後二材それぞれが正中線で左右に二材短くしていることを指摘している（注2）。その後『神奈川県文化財図鑑 彫刻篇』の解説では、頭体幹部一材製とし、内削りのうえ割首して、後頭部には別材を短くしていると理解されている（注3）。塩澤氏は、

頭体幹部を耳の後ろを通る線で前後二材矧ぎとし、内刳りのうえ割首として、背面に前後二材を矧ぐと理解されている(注4)。最近の報告としては、山本勉氏、花澤による令和二年(二〇二〇)の調査成果に基づいたものがあり、頭体幹部を耳の後ろを通る線で前後二材矧ぎとし、内刳りのうえ割首して、体部背面に左右二材を矧ぐと理解している(注5)。『神奈川県文化財図鑑』の解説を除く三編では、頭部前半材の正中には矧ぎ目をみとめず、塩澤氏、山本氏・花澤は体部前半材を一材とみた。また、大正十五年修理時の美術院による修理図解には各矧ぎ目が補修されていることが示されているが、頭部前半材の正中にはそれがみられない(図10)。

この度の調査では、像底からの目視及びコンパクトカメラによる撮影によって、像正面中央に頭部から体部材まで至る矧ぎ目を確認することができた。従来、像底から像内を観察した場合、頭頂部に矧ぎ目がみられないことから、一材製や前後二材製と判断されてきたようである。矧ぎ目がみられないのは頭頂部に別材を矧ぐためである。頭頂部の別材部分の矧ぎ目及び頭部前方材の正面の矧ぎ目については、理由はわからないが美術院の国宝修理図解には記されておらず、いずれかの段階で見落とされたのだろう。また後半材については、肩の後ろに横木一材を渡して後頭部材の首柄を受けており、頭部と体部は別材もしくは頭体部材を切り離れた痕跡とみた。後頭部材を受ける横木を用いる作例として、仁平元年(一一五一)の奈良・長岳寺阿弥陀如来像がある。長岳寺像は体部背面材の上縁に後頭部材を受ける横木二材を寄せているが、平成二十九年(二〇一七)に行われた東京国立博物館のX線断層(CT)撮影画像によって、それが後から入れられたも

のと推察され、体部の厚みの調整に伴う措置であった可能性が指摘されている(注6)。本像の肩の横木がどの段階で入れられたものかは不明である。また、文治五年(一一八九)の奈良・興福寺南円堂康慶作不空羼索観音像は、肩のあたりで後頭部材を受ける材を使用し、髻の頂に別材を矧ぐ。肩に横木を用いる像としては、伊勢原市・宝城坊薬師如来像も挙げられる。

両脚部については、前後二材矧ぎとする点も注目される。前材は地付に対して木目が平行になり、後材は木目が垂直になるように材を用いている。両脚部に複数材を使用するのは平安時代後期の定朝以来の丈六阿弥陀如来像に用いられる。例えば、京都・平等院定朝作阿弥陀如来像、同法金剛院院覚作阿弥陀如来像、同法界寺阿弥陀如来像の三像は両脚部材に前後三材を用いている(注7)。なお、平等院像と法金剛院像の頭体幹部の前半材は正中で左右二材を矧ぐが、頭部と体幹部は割首をしていない。一方、法界寺像は前半材を正中で左右二材矧ぎとし、かつ割首をする。本像の木寄せの基本構造は、材の細かさの差はあるものの法界寺像と共通する点が多い。

本像の構造については、実査によってこれまでとはやや異なった見解が得られた(注8)。平安時代後期から鎌倉時代初頭にかけての中央で活躍した仏師が造像した仏像の構造と似通っていることは重要であろう。本像の作者については、中央との関係がある正統的な仏師が考えられ、一方で、運慶の造った仏像とは距離がある。現段階では推測の域を出ないが康慶や成朝等の世代の奈良仏師、奈良仏師周辺の仏師が候補に挙がってくるだろう。

注

- (1) 丸尾彰三郎氏による、左脇侍像台座の寛永十二年(一六三五)の修理銘から逆算した安元元年(一一七五)頃を三尊の製作年とする解釈が長く定説となっていた(鎌倉地方仏像建長以前以後)〔『東洋美術』五、一九三〇年〕。これに対して塩澤寛樹氏は、證菩提寺創建年と三尊製作年とに年代の開きがあることに鑑み、三尊を鎌倉時代初期、十二世紀末の様式を示すものとみて、文治五年の寺創建あるいは建久八年(一一九七)の寺観整備にかかわる造立と推定した(神奈川・証菩提寺阿弥陀三尊像再考)〔『神奈川県立博物館研究報告 人文科学』二五、一九九九年三月〔鎌倉時代造像論 幕府と仏師〕所収 二〇〇九年二月 吉川弘文館〕。最新の論考では山本勉氏が、塩澤氏の推定に対して、三尊の様式解釈に疑問が残るとし、三尊が岡崎義実建立の源義朝菩提堂本尊として造立され、文治五年(一一八九)に證菩提寺の地に建立された義忠菩提堂に本尊として転用されたと解釈して、年次の開きを説明する上杉孝良氏の案(岡崎義実とその周辺)〔『三浦一族研究』八、二〇〇四年〕を取り上げたうえで、この三尊像の作風は、鎌倉新様式が登場する直前の頼朝周辺の武士の造像の水準を示すものと考えられるとしている(『横浜仏像史序説―古代・中世前期を中心に―』〔横浜市歴史博物館編『横浜の仏像―しられざるみほとけたち』所収〕二〇二一年)。
- (2) 三森達夫「證菩提寺蔵国宝阿弥陀三尊像の木寄に就いて」〔『横浜市史料調査報告書 第二輯』一九四九年九月〕。
- (3) 「木造 阿弥陀如来及両脇侍像」(神奈川県教育庁社会教育部・文化財保護課編『神奈川県文化財図鑑 彫刻篇』一九七五年三月)。
- (4) 前掲注(1) 塩澤論文。
- (5) 山本勉・花澤明優美「木造 阿弥陀如来および両脇侍像(證菩提寺)」〔『横浜の文化財―横浜市文化財調査概報―』二七) 二〇二二年三月。
- (6) 皿井舞「調査報告 奈良・長岳寺 阿弥陀如来坐像、観音菩薩坐像」〔MUSEUM』七〇三) 二〇二三年四月。
- (7) 西川杏太郎『木造と寄木造』〔『日本の美術』二〇二) 至文堂、一九八三年三月。
- (8) 本稿にまとめた構造の理解は、実査後に提出された公益財団法人美術院国宝修理所による修理解説書の記載とも大略齟齬がないことを確認している。修理解説書による中尊阿弥陀如来像本体の品質構造の記載は左記の通りである。
- 桧材、寄木造。漆箔仕上げ、肉髻珠・白毫は水晶製。彫眼。螺髪切り付け。頭体幹部は大略左右二材矧ぎ。矧ぎ目は正中を通る。内刳りを施し、三道下で割首とする。頭部の髪際より上に別材を矧ぐ。後頭部に一材を当てる。背面肩に横一材を渡し、後頭部の材を受ける。背面肩下がりから地付付近まで背板状に一材を矧ぎ、地付に別材を矧ぐ。左右体側部に、左は内外二材、右は前後二材を矧ぐ。左腰脇に小材を矧ぐ。左袖(前膊)に別材を矧ぐ。右腕は肩・肘・手首で矧ぎ、上膊・前膊各一材製。両手先は共木か。右腰脇に側面一材、上



図1 横浜市・證菩提寺阿弥陀三尊像 正面

面一材を矧ぐ。両足部は大略横一材製。両膝前面に薄材、左
右地付に各横木一材を矧ぐ。頭体幹部・左体側部・両足部を
通して内割りを実施す。両足部内割りに小材（四材）を内側か
ら不規則に当てる。裳先別材矧ぎ付け。



図2 阿弥陀如来像 正面

図版出典

図1～10 荒井孝則氏（写真技師）撮影。



图 4 阿弥陀如来像 右侧面



图 3 阿弥陀如来像 左斜侧面



图 6 阿弥陀如来像 背面



图 5 阿弥陀如来像 头部正面



图7 阿弥陀如来像 像底



图9 右脇侍像



图8 左脇侍像

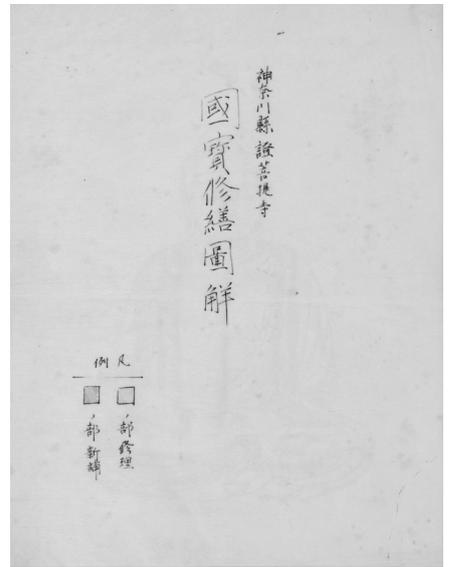


图 10 美術院作成「国宝修繕図解」 個人蔵